



No.40

# mi.ra.i.e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2020年7月10日

編集・発行 出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033 東京都文京区本郷 4-37-18 いろは本郷ビル 2階

TEL 03-3816-2911 FAX 03-3816-2980 E-mail rouren@syuppan.net URL <http://www.syuppan.net/>

## 映画に見る日本の課題



### 悩む人たちと悩まない人たち

#### ～報道の映画

伊豆野 潔（出版情報関連ユニオン取次支部）

報道をめぐる日米の2本の映画を紹介しながらいろいろと考えてみたい。2017年に製作された『ペンタゴン・ペーパーズ～最高機密文書』は、日本では2018年3月30日に封切られた。当時森友問題で忖度や隠蔽、改竄が暴露されることによって沸き返っていた日本の政治情勢とも関連して、話題になった。

スピルバーグが監督でメルル・ストリープとトム・ハンクス（余談ながら今年新型コロナウイルスに感染して時の人となった）が主演。ベトナム戦争の実情を隠蔽してきたケネディら4人の大統領やマクナマラ国防長官、それを暴露したニューヨーク・タイムズやワシントン・ポスト、暴露に激怒する当時の大統領ニクソンの闘いが描かれる。70年代初頭の新聞づくりの現場が再現されていてこちらも興味深い。植字工が大活躍する時代だ。

この映画に関連して『創』に森達也が非常

に興味深いことを書いていた。同じころに日本では沖縄密約問題が起こり、毎日の西山記者がスクープしたが、「情を通じ」でその意義はかき消された。『ペンタゴン・ペーパーズ』でトム・ハンクス演じた編集主幹ベン・ブラッドリーは、西山記者が不倫関係にあった外務省事務官から情報を入手したと聞き、「ブラボー、やったじゃないか」と叫んだそうである（琉球朝日放送のドキュメンタリー「メディアの敗北」の一場面）。

『さよならテレビ』は2018年9月に東海テレビ（フジテレビ系列）開局60周年記念番組として東海地方限定で放送されたものの映画化で、2020年1月に公開された。テレビの現場で何が起きているのかを探るため、東海テレビのドキュメンタリーチームが自社の報道部にカメラを入れ、現場の生の姿を追っていく。普段はカメラを向ける側でカメラを向け

られたことのない報道部員に反発されながらも、「セシウムさん事件（番組放送中に「怪しいお米 セシウムさん」などというテロップが表示された）」でトラウマを持つエースアナウンサー、企業絡みの案件をこなしつつも社会問題に強い問題意識を持つ骨のあるベテラン契約記者、危なっかしい新人契約記者の3人にスポットを当て映画は進んでいく。そこに浮かび上がってきたのが「働き方改革」だ。

番組の撮影開始は 2016 年末であり、前年の電通社員高橋まつりさんの過労自殺がようやく社会問題となったときで、会社は残業削減を厳命するが、視聴率は上げろ、他局に負けるな、という。残業は減らせ、仕事量は減らすな、ということだ。そのような矛盾だらけの中で3人とも仕事に、雇用に、テレビのありように、悩み続ける。『さよならテレビ』の番組クルーもそれは同じだ。

時代も題材も全く異なり共通するのはメデ

ィア内部を描いたということだけだが、単純に見比べれば、グズグズの日本のテレビ（当時の東海テレビに即すれば共謀罪という言葉さえ消された）はひどい、悩むことなく「正義」を貫いたW・ポスト（社主は経営に響きかねないと悩むが）をはじめとするアメリカのメディア、偉い！ となる。しかしケネディやジョンソンの民主党政権が泥沼にしたベトナム戦争の秘密の隠蔽のつけを、なぜ共和党のニクソン政権が払わされたのか？ またそれを 2017 年の時点で映画化したスピルバーグの狙いはどこにあるのか、ということは考えたい。もちろん日本のメディアには、当時のW・ポストなどを見習って忖度の強要などの抑圧をはね返せと言いたい。私は「支配階級の思想は、どの時代においても、支配的な思想である」という先哲の言葉を胸に、あらゆる報道について考えていきたいと思う。

## 赤狩り THE RED RAT IN HOLLYWOOD 1~7

山本おさむ 著



価格 552 円＋税 (1 集)  
発行 小学館  
東京都千代田区一ツ橋 2-3-1  
販売 03-5281-3556

コミック「赤狩り」は、『ローマの休日』から始まる。あの名作が「赤狩り？」と思われるだろう。原爆の力で米国は覇権を握ろうとしたが、スパイが情報を渡しソ連も原爆開発に成功、冷戦に。連邦議会下院に設置された非米活動委員会（HUAC）は共産主義者を取り締まり、効果を狙ってハリウッドを標的とする。FBI と強力な関係を持つ HUAC はトランボら脚本家・監督等 19 人に召喚状を送る。彼ら是对決姿勢を示し、その応援団ができた。この中にワイラーがいた。聴聞会は恐怖を作り出し、裏切り、転向、たれ込みが横行する。応援団も雲散霧消する。トランボは議会侮辱罪で刑務所へ。出所後、トランボはやむなく偽名で『ローマの休日』を書き、ワイラーは恐怖の米国を脱出してローマでメガホンをとった。映画の結末の「信頼を守る」ことに彼らのメッセージが込められている。世界的大ヒットによりワイラーは HUAC に召喚されることはなかった。「赤狩り」はこの時代の米国を強烈に描いており、のめりこんで読んだ。続きを雑誌で読もうかと思わせるほどに。（「ビッグコミックオリジナル」2017 年 11 号から連載。単行本は 7 集まで）



## 『AI 崩壊』が可視化する超監視社会

小山 比路志（出版情報関連ユニオン）

映画『AI 崩壊』（入江悠監督・2020年）を観て想起したのが『逃亡者』（1993年）『エネミー・オブ・アメリカ』（1998年）という米国映画とジョージ・オーウェルの小説『1984』（1949年）だった。

濡れ衣を着せられた主人公が巨大な国家権力の監視網をかいくぐって逃げるサスペンス仕立ての展開は、いわば見せる映画の定番だ。それと同時に、ビッグデータをデジタル化しAI（人工知能）によって分析・学習させ、ICT（情報通信技術）を駆使した解析・追跡・監視という態様がどのようなものであるのかを私たちは見ることになる。その一つは「逃げられない」という恐怖にも似た感覚である。

物語の構成は、10年後の2030年、医療に特化したAI「のぞみ」が暴走を始める。人間の指示命令を拒否して自動思考モードに入る。集積された国民のビッグデータに対して、命の選別を始め、余命価値を判断する。消去の手段を決めて、実行する開始時刻に向けて動き出す。たとえばこんな具合だ。「あなたの生涯医療費の総計は2億5000万円です。早期絶命を推奨します」「消去手段、がん細胞の増殖」と。

“テロリスト”に仕立て上げられるのが、「のぞみ」の開発者である主人公の桐生だ。その敵役となるのが警察庁の犯罪捜査AI「百眼（ひゃくめ）」の開発者・警察庁の桜庭理事官である。桜庭は、「のぞみ」の機能を「百眼」の機能強化に活用したいと桐生の義弟の西村に近づくが、「のぞみは人に寄り添うAI」と断られる。桜庭は「国家保安法案」の成立を図る副首相の岸と気脈を通じている。

この岸という男は、国民の個人情報（生年月日、住所、学歴、病歴、犯罪歴、収入構成、家族構成、血液型、遺伝子、顔・体格・歩行の特徴、電気・ガス・水道・利用交通機関、

貯蓄、購買傾向、思想傾向など）を国家権力が一元管理し、国家の安全に資する「国家保安法案」を成立させようと首相の田中に迫るが拒否される。だが、「のぞみ」の暴走は、田中首相らの心臓ペースメーカーを誤作動させ急死させてしまう。後任の首相となった岸は、「国家保安法案」の早期成立をめざすと声明。マスコミは「この法案には国民一人ひとりの個人情報を国家が掌握するという人権の問題がある」と懸念を弱々しく報道するのみだ。

しかし、「生産性の低い弱者救済という不合理な考えは不要だ」という核心に、映画は焦点を当てているわけではなく不満が残る。われわれが体感するのは「超監視社会」の近未来である。それはそれで意味があるといえよう。最後のどんでん返しはちょっと爽快ではある。皮肉にもインターネットに通じたマイクとカメラを内蔵した超小型ドローンが桜庭を凝視している。

ところで我が国では5月27日、スーパーシティ法（改正国家戦略特区法）が成立した。安倍晋三首相と竹中平蔵パソナ会長が旗振り役だ。AI、ビッグデータ、ICTを活用し、オンライン診療、車の自動走行、ドローンでの配達、キャッシュレス決済、スマホの位置情報、街中の監視カメラ、そして新型コロナウイルス感染症を口実にしたマイナンバーカードと銀行口座の紐付け等を実現する。

このことは、経団連が呼号する「デジタル化の促進による産業構造の転換」と密接に関係する。トヨタが富士の裾野に創ろうとしている「スマートシティ」がそれにあたる。一部のIT人材と数多の使い捨て自由な非正規雇用労働者との労働者の階層分化が進むだろう。労働者を管理する「恐るべき超監視社会」ができあがる。要注意だ。



## 映画とNスペから、原発のことを考えよう

富山 裕美 (出版情報関連ユニオン)

『Fukushima50』(若松節朗監督、2020年)、あの福島第一原発事故が映画になった。東京電力元幹部3人の責任を問う刑事裁判(2017.6~19.9)は、3人の罪を明らかにする数多くの証言があったのに、全員無罪の判決。この東電をどのように描いているのか。

角川大映スタジオに再現された1・2号機中央制御室と緊急時対策室(免震棟)が舞台だ。

2011年3月11日の大地震から16日までの福島第一原発(フクイチ)の記録。緊急スクラムで核分裂反応を制御できたが、大津波に襲われ、全電源を喪失する。このままでは、非常用炉心冷却装置も動かず、メルトダウンを起こしてしまう。1号機原子炉格納容器の圧力が上がり始め、圧力を抜くには手動でベントを行わなければならない。高線量の中、全面マスク・防護服を着け酸素ボンベを背負い決死の覚悟で弁を開けに行く。余震が続く緊迫した状況で、被ばくを怖れず最悪の惨事とにならないよう作業員たちは闘った。

原発事故のフクイチの中の状況を再現してくれたことに感謝しよう。しかし最後が夜ノ森の桜というのは「希望」で終わっており、そこはいまだに帰還困難区域であり、原発事故は続いていることを印象づけない。エンドロールで「制作協力 復興庁」が出てきたことにも驚いた。国と東電の共犯関係を示しているのか。パンフレットの解説ページには、対策面を充実させてほしかった。

『NHKスペシャル「原発事故は防げなかったのか～見過ごされた“分岐点”へ」』(2020年3月)で、メルトスルーを引き起こした「大津波」の検証を見た。映画では想定外の大津波との説明だったが、そうなのか。

Nスペでは、津波対策ができるチャンスがあったという。2007年地震調査研究推進本部の長期評価は、三陸沖～房総沖のどこでも巨大地震が起きうるという新研究。電力会社4

社(日本原電・東北電力・日本原子力開発機構・東電)の協議記録がある。東電は前向きに捉え最大限の対策が必要と考えた。だが08年7月、長期評価には一部の専門家に異論もあるので津波対策を保留にと原子力部門副本部長が方針転換をする。07年の柏崎刈羽原発全基停止(中越沖地震)の影響だ。他社も協調する(原電は非公表で津波対策を進めた)。08年「貞観津波」の最新研究が発表され巨大津波のリスクが突きつけられた。12月、東電は検討はしたがバックチェック(BC)の対象にならないと判断。東電から繰り返し足並みを揃えるよう要請されたが、東北電はBCに津波対策を書き込んだ。規制機関の経産省原子力安全・保安院も「貞観津波」に向き合わず、BCの仕組みでは津波を中間報告ではなく最終報告での審査に入れていた。

2010年福島県が経産相にプルサーマル受け入れの条件として耐震安全性の確認を求めた。しかし地元は原子炉の増設(7・8号機)を望み、その条件がプルサーマル受け入れだったので、先延ばしができず県の担当者は耐震安全性の確認を中間報告審査でよいとしたため津波対策は入らなかった。

自然災害という不確かなリスクに対して、国、電力会社、自治体はそれぞれの事情にとられ、津波対策のチャンスを生かせなかったとNスペはいう。

これらの映像を見て、原発の安全神話は崩れており、完璧に制御できない原発はすべて廃炉にすべきとあらためて思う。原発推進の経産省から独立した原子力規制委員会が本来の役割を果たすよう監視しよう。原発関連のパブコメも出そう。修正させられなくても数の力はあると思う。原発裁判の傍聴も大切。東電刑事裁判、地裁のように高裁も満員にしよう。すべての原発を廃炉にするまで!



## 『ジョーカー』と『明日へ』そして日本

小日向 芳子（出版労連副委員長）

あまりにも比較の対象にならない2本の映画を選んでしまいました。

ジョーカーは、映画『バットマン』に出てくる快樂殺人鬼。彼がなぜ「ジョーカー」になったかが描かれています。ヴェネツィア金獅子賞受賞なのでご覧になった方も多いと思います（T.フィリップス監督 2019年）。

主人公のアーサー・フレックの職業は、コメディアンですが、彼の生い立ちはあまりに不幸で自己逃避のために笑いを選んでいます。ピエロの扮装で人を笑わせようとしますが、「ウケる」「笑いを取る」ことができた時でも、そのことで彼が幸福感を得ているとは思えません。なぜなら「笑われている」ことに段々と不快感が漂うからです。

彼は、カウンセリングも市の財政悪化で受けることができなくなります。その最後の時、カウンセラーに向かって「いつも質問ばかりして自分の話を聞いてくれなかった」と怒りをぶつけます。

バットマンの架空都市、ゴッサム・シティは貧富の差が激しく人々の不満が渦巻き強盗や殺人が日常化し、市長選には人々の期待を集めた大金持ちが立候補する、いかにもアメリカ的。

彼を「ハッピー」と呼ぶ母親から、自分は大金持ちの隠し子と刷り込まれたアーサー。真偽を確かめるために大金持ちに会いに行くが、父でないとされる。昔母親が入院していた精神病院でカルテを見て、虐待されていた悲惨な自分の子ども時代がフラッシュバックし、彼は大声で笑い泣き崩れます。

最初の殺人は偶発的なものでしたが、どんどん歯止めがなくなり、念願だったテレビ出演の場でも殺人を犯してしまう…あまりにも救いが無い。虐待や貧困、社会的冷遇のなかで、こうして彼は「ジョーカー」となったというわけです。

今の日本での児童虐待相談対応は、厚生労働省発表（2018年度）の件数は15万9850件で、前年度より2万6072件（19.5%）増

え、過去最多を更新しました。コロナ禍の影響もあり貧困格差が進んでいます。日本が救いのない国にならないよう、社会的なつながり、そして社会保障の充実が重要と思います。

韓国映画『明日へ』（プ・ジョン監督 2014年）は、実話を元にしてしています。

「お客様は神様、会社の繁栄は、私たち従業員の繁栄」が朝礼の掛け声の大型スーパーマーケットで働く主人公ソニは、入社5年目で正社員への登用が決まったレジ係。これで少しは暮らしが楽になると希望を膨らましたが、会社の方針が変わり派遣社員の導入により非正規社員には突然の解雇通告です。納得できない仲間たちで組合を作り交渉します。はじめは相手にしなかった会社でしたが、組合員たちが職場を占拠し、闘い・支援が広がり、マスコミが報道し始めると態度が軟化し話し合いに応じます。一方で「今組合を抜ければ雇い入れる」と分断工作、裏では暴力集団を使って占拠しているテントを破壊し、シングルマザーの幼児が大けがをします。さらに会社は、組合幹部に対して店舗閉鎖による損害賠償を求めてきます。

まるで組合弾圧の見本のようなお話、日本でも同じような暴力事件、分断工作がありました。

映画の中では、彼女たちの苦悩や仲間の支えあい、子どもたちの成長と貧困の問題が随所にあり日本の状況と比較してしまいます。

この映画は、最終的に幹部が責任を取って解雇となり、非正規社員は雇用されて終わります。

今年5月に大財閥サムスングループ中核のサムスン電子が、労働組合を容認しました。これまでの「無労組経営」の方針を撤回し、「労働三権の保障」を約束。これは、昨年12月の裁判で長年にわたる組合づくりへの組織的な弾圧が違法の判決を受けたことによるものですが、世論と労働者の粘り強い運動の成果です。私たちも、貧困格差をなくし、誰も取り残されない社会をつくるためつながっていきましょう。



## スクリーンの上の子どもたち：

### 『子どもたちをよろしく』『存在のない子供たち』

北林 岳彦（出版労連原発問題委員会事務局長）

今日もまた「児童虐待」事件のニュースか、ということが続きました。しかしここ数か月は政府による独断的政策の乱発。その後付加的・場当たりの理由がヘッドラインを占め、巷で起きていることが覆い隠されてしまっているのではないかとさえ思っています。

今春のアカデミー賞・最優秀作品賞を韓国の『パラサイト 半地下の家族』がさらったように、社会矛盾を、あるいはそれをバックグラウンドにした作品が次々に登場し注目を集めていることはひとつの現象です。

『パラサイト』は昨年のカンヌ映画祭でも審査員全員一致でパルムドールを受賞。同映画祭はレジスタンス運動にルーツがあるので硬派志向とはいえ、韓国もフランスもアメリカでも、資本活動の自由化で雇用・賃金水準が低下、格差は拡大、公共福祉は後退し医療も教育も自己責任化が進むなか、フランスの「黄色いベスト」運動に代表される異議申し立ての隆盛が背景にあると言えます。

しかし『子どもたちをよろしく』（隅田靖監督 2020年）は2018年のカンヌでパルムドールを受賞した『万引き家族』のようなペーソスも人間の温かみに救いを見出せる要素も盛り込まれてはいません。ひたすら子どもたちを含む人間の暗部、弱さを描こうとします。企画した寺脇研・前川喜平両氏のこの国のオトナたちに対する告発が、容赦ない描き方を追求させているようです。

そのリアリズム志向は成功しているかどうか。ある層の観客にはショックを与えるでしょう。しかし敢えて盛り込まなかったという学校でのシーンの欠如が、陰湿なイジメを受ける中学生「稔」の日常描写に今一つ物足りなさを感じさせます。

また自己肯定感喪失のためデリヘル嬢として生きている「優樹菜」は、自立性を感じさせ

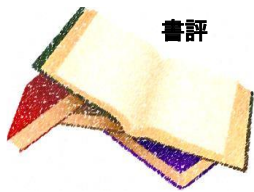
る力強い印象があるのに、出身地では忌避傾向がある風俗業に就いているという設定上の無理が気になってしまいます。出会い系バーで前川氏は女性たちの身の上をかなり聴き込んだそうですが、この映画に反映されているのかは判りません。総じて言えば2016年度のパルムドール『わたしは、ダニエル・ブレイク』の淡々とした手法に倣ったのでしょうか。

2018年のカンヌで審査員賞と教会関係者が選ぶエキュメニカル賞を受賞したのが『存在のない子供たち』（N.ラバキー監督）。シリア難民の男の子ゼイン君が同名の主人公を演じて話題になりましたが、シリア内戦も難民問題も主たるテーマではなく、貧困と児童虐待が移民労働などに絡めて展開します。

原題“カフルナウム”はイエスが癒した人びとが教えを守らず、崩壊を預言された村の名前に因みます。しかし宗教的教訓の提示ではなく、子どもたちにとって過酷な混乱した社会状況を指すものです。物価高騰、財政破綻、その後債務不履行宣言に至っているレバノンで制作されました。こちらもドキュドラマ風にリアリズムを追求。しかしドラマ展開の早さ、キャラクターの強さ（演じるのは市民！）、子どもたちの魅力にぐいぐい惹き付けられます。自分を産んだ罪で親を訴えるという展開にも無理を感じません。

日本では出生届がないことに注目したタイトルでしたが、興味深いことに国際的な興行収入の約8割(!)を占めた中国では「何を以て家と為すか」。香港では「星の仔が裁判を起こす」、台湾では「ぼくに家があったなら」、クリスチャンが多い韓国では原題のハングル表記でした。それぞれの国での子どもたちをめぐる状況認識が現れているかも知れません。

子どもたちから生きる意味を奪わないでほしい。作品から聞こえてくる声です。



書評

## 『海の底から』

金石範 著

2020年2月 3800円+税 岩波書店

『海の底から』のカバー袖に「『火山島』の続々編にあたる本作は、金石範文学の原点であり、巨大な小説の終わりでもある」とある。『火山島』全7巻（文藝春秋、各巻2段組、500ページほど）は第1巻が83年6月発行で、帯に「八万の人が虐殺された済州島四・三事件を背景に描く若き革命家たちの群像」とある。解放後の朝鮮に駆けつけた在日の若者・南承之と、ソファーにいつも座っている済州島の資産家の民族主義者（日帝時代の小学生のとき、奉安殿に小便をかけた！）李芳根の二人が主人公である。日帝支配下でその手先となって民族主義者を弾圧した親日派が、アメリカ軍政下でも親玉を取り替えただけで権力を握り、左右を問わず統一朝鮮をめざした人々を弾圧し、暴政をしく。統一朝

鮮をめざす闘いは済州島4・3蜂起として爆発し、その後のゲリラ闘争と残酷な弾圧……。

『火山島』の続編である『地底の太陽』（集英社）と『海の底から』は済州島4・3蜂起に敗北し、豚になってでも生きることを決意して日本に密航した南承之の苦闘を描く。大長編にもかかわらず、まだまだ続きがあるはずだが、金石範も94歳の高齢である。ともあれ済州島4・3蜂起とゲリラ闘争、その後の日本での闘いを描いた9巻に及ぶ『火山島』総体が、日本語で書かれた「世界に冠たる大長編」である。思想小説にして、恋愛小説であり、美食小説でもあり、済州島四・三事件を描いて世界を掴もうとする全体小説である。この日本語文学の宝を、いつでも読めるようにするのは出版界の責務ではないか。（伊豆野潔）

## 原発は3密！

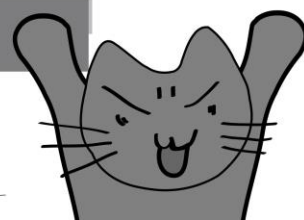
玄海原発で作業員が感染！

柏崎刈羽原発勤務の東電社員5人感染！

火力・水力の多くは  
無人運転が可能  
再生可能エネルギーは  
現場に人はいない  
自粛で産業用電力需要が  
大きく低下！  
電気は余っている **ニカ**

## 原発運転停止せよ！

ちゅーとー



## 原発事故からコロナウイルス、その先の未来へ

佐藤 里美 (主婦 福島県福島市在住)

9年前の震災当時、仕事で仙台市にいた私は、激震による停電、さらに黒い津波を見て、止まらない余震が続く中、職場で2日過ごしました。自宅に帰った直後、原発事故の報道があり、暫くは自宅で将来を悲観する日々が続きました。しかし避難者支援の仕事の後、原発避難地域の方や復興の様子などを動画撮影し取材する仕事に携わりました。そして、縁あった方と結婚し、現在は一児の母となりました。子を持つ親として心配もあり、子どもに定期的に甲状腺、尿中セシウムの検査をしています。また物理的に離れることにより放射性物質の体内への蓄積を軽減できると聞き、娘を福島から他県の保育園に通わせ、長期休みには他地域に保養に出かけています。

原発事故後に暮らしていく中で気づいた大事なことがあります。それは「報道だけを鵜呑みにせず、気になったことは自分で調べてみる」ということ。各種報道機関、政府、自治体、SNS等からの情報は本当であるのか、可能な限り自分の目で見て聴くこと。震災後一時は、「福島で生まれた子どもに奇形児が著しく増えている」とのSNSの書き込みを見ました。しかし我が子や身近な人を含めて、奇形児は一人もいません。また放射性物質に留まらず、食事、予防接種、地球環境に関わる各種講演会、勉強会へ参加し、本を調べてみると国や自治体の促すことは安全とは言えず、鵜呑みにはできない、と思うようになりました。今年世界を震撼させているコロナウイルスも連日メディアで感染者、死者の報道をしています。しかし、陽性で死亡した方が、他の感染症や疾患に罹患している等の周辺情報もないまま、コロナ患者を一括りにして数だけを集中的に報道しており、不安を煽るように感じ、腑に落ちないのです。

原発事故後、福島の人や農作物に対し何年かは辛い差別視、風評被害という問題もありましたが、福島で暮らす中で感じた復興への軌跡は、「人が助け合い、協力していく姿」でした。今回全世界規模で蔓延するコロナウイルス後の社会は、今までの常識が崩れ、社会全体の仕組み自体も見直すことになるかもしれません。しかし、どんな未来も善良な人と意識を共に協力することで乗り越えられると、震災・原発事故の経験から思うのです。アフターコロナも「日本、世界全体でひとつになり、温かく支えあうこと」を願ってやみません。

### ✿ 編集後記 ✿

巣ごもり生活で映画を見る機会がふえた方も多いのではないのでしょうか。映画は、私たちに夢を与えてくれるだけでなく、厳しい現実を見つめることも教えてくれます。今号は「映画に見る日本の課題」と題し、いくつかの映画を紹介します。メディアに働く者の葛藤を描いた『ペンタゴン・ペーパーズ』『さよならテレビ』、近未来の超監視社会を描く『AI 崩壊』、福島第一原発をとりあげた『Fukushima50』『NHK スペシャル』、格差と貧困を描く『ジョーカー』『明日へ』、子どもの生きる意味を考えさせる『子どもたちをよるしく』『存在のない子供たち』です。映画からどんなメッセージを受け取るかは、さまざまですが、そこから私たちの課題が見えるかもしれません。一本の映画が人生を変えることもあります。たかが映画、されど映画です。(T)